

翻訳・資料

ベネデット『マルコ・ポーロ写本』(六⁻²)^{1*}

高 田 英 樹 訳*

**Luigi Foscolo Benedetto:
Il Milione la tradizione manoscritta (6⁻²)**

Hideki Takata (Trans.)*

キーワード

マルコ・ポーロ、ヨーロッパ中世写本、中世東西交渉史

第2章 グレゴワールの改作版 (FG)

5. 様々な下位グループの特性 [つづき]

B はさらに小グループに分かれる。

B¹ と B² は一対をなす。同一写本の空間的にも時間的にも極めて近いコピーである。その同一性は、もしこれら二つが同一の手になるものであったなら——私にはそうではないと見えるが——さらに大きかったであろう。それは綴りの特長にまで及んでいるし (assez <とても> を ces, de l'an <年の> を au chief de la, astrologues <星占師> を estreloges, religion <宗教> を celegion, seloc <によって> を selec, garces <娘> を graces 等)、挿絵の似かよよりもそれをさらに目にも明らかなものとしている。例えば、両写本の第 124 章共通の見出しに、「一つは金もう一つは銀」の二つの塔が「絵に」見られと記されているが、実際にそれが描かれている。もっとも、細密画は B² の方が B¹ のよりはるかに優れているが、テキストについては同じことは言えない。こうした一致を壊すいくつかのさして重大でない異なりは、B² の有利には働かず、むしろ最初は B² が B¹ の単なるコピーであるかのごとき印象を与える。B¹ は例えば touz les tartars du quant il le sorent <・の全タルタル人・・であった時> と、du の後の monde <世界> を飛ばしている。B² はこれをさらに悪化させ、touz les tartars du grand il le sorent <大 [汗] の全タルタル人は・・であった> とある。第 111 章 (B の番号による) の見出しは両写本とも

* たかた ひでき：大阪国際大学人間科学部教授 (2003.5.28 受理)

「グエンジャンフの町について、王国がある。グラン・カンがいかに息子マンガレイを戴冠したか見られる」。ところが、戴冠式を描く細密画は B¹ にしかない。それでも、一つの共通の原典からであることを証す要素は、確信していいもののように思える。B¹ では第 165 章の最初の語句は何らか移動されたことを示しているのに対して、B² では同グループの他の写本と同じ語順になっている。さらに 2 度 B² はこのグループの読みを残している。すなわち第 4 章、B¹: le vous contera <彼が皆さんにお話するだろう> に対して B²: le vous conterai <私が皆さんにお話しよう>, 第 161 章、B¹: en celle nasule que de II vens に対して B²: en celle ne s'use que de II vens <その中では 40 しか使わない>。第 122 章では B² は B¹ より完全である: car presque toit la gent du roy y furent occis et le remanant tout desconfis <すなわち王の兵はほとんど全員殺され、残りは皆降伏した>。B² には occis <殺され> が欠けている。第 69 章では B²: leur esture sont de touz le plus dras <彼らの衣装は全て最・錦である> とあり、plus と dras の間に空白がある。この欠落は B² とは異なるモデルを考えさす。何故なら、B¹ にははっきりと le plus de dras <最上の錦> と読めるからである。正しい読みが haras <種馬> である個所では、B¹ は bains <浴場>, B² は hains <憎悪> となっている。B¹: demoura en son appareil <支度において遅い>, B²: demoura est son appareil <支度が遅い> となっているのは、2 人の写字生が上に省略記号のついた同じ e を違ったふうに解釈した証拠である。両テキスト間の他のいくつかの隔たりは、B² の不注意として十分に説明することができる。それらにおいて B² は B¹ からもグループの残りからも離れているからである: Bogata <ボガタ> を Flogata <フロガタ>, l'epsodie <飾り> を le yodie <宝石>, Suficar <スフィカル> [肅州] を Susicar <スシカル>, MCCLXII <1262 年> を MCCLXXII <1272 年> (山の老人に対する遠征の年代) 等。

B³・B⁴・B⁵ は、B¹・B² に対してははっきりと異なるもう一つの下位グループをなす。B³ が他の二つよりかなり古く³²、B⁵ が B⁴ よりはっきりと新しいとしても、共通の祖本の特徴的な個所を再生している一致は、ある意味でこれらを同世代のものとしている。これらが派生している元の写本は、B³ にとってはほぼ間違いなく直接のモデルであろうが、B⁴ と B⁵ は中間写本、それもおそらく同一の、を通じてそれに遡るにちがいない。すなわち B³ にはない誤りを共有しているし (両者とも例えば、コカチン姫を 17 ではなく 15 歳とする)、B³ ではもっと短い形になっている箇所を同じように引き伸ばしている (例えば前掲引用箇所参照)。時代的により後の B⁵ は、数多い誤り、頻繁な勝手な追加、曖昧な個所や語彙の絶えざる言い換え、言葉と文体を一貫して新しいものに変えること、こうしたことのため興味に乏しく実際上の有益さは何もない。FG に対して B⁴ よりも保守的な形が残っている個所は、それから派生したのではないことの証明としてのみ興味を引く。例えば、ボーロ 2 兄弟のアークレ到着を 1260 年ではなく 1460 年に置く。マルコが自分の滞在した町について述べていることをグラン・カンのことにする: 「彼らは、グラン・カンのいるクレメンフの町に着いた。彼はとても豪華に身を飾っていた」。archerie <弓手> を facon <習慣> と訳したり、古い o <と> を ou <あるいは> と混同したりする。以上はもちろんほんのごく一部でしかない。B⁴ は、これも言語的には少し新しいものに変え

られてはいるが、内容をずっとよく尊重しており、B³の確認、時にはその完成や訂正の役に立つことがある。以上からして、この第2グループの現実とその特徴的な性格について何らの疑いも残らない。それぞれの写字生の避け難い欠点もこのコピーの価値を損なわない。しかしポーチェは、その断続的でしばしば不忠実な注記でもって、その真の性格を我々に示すことに成功していない。不注意や誤解も欠けていない^{9*}（「多くの部分に」が「全ての部分に」、「7ヶ月」が「1ヶ月」、「百の腕」が「百のズボン」等）；いくつかの新たな欠落の責も負わねばならない（CLIII 64 以下、car sachiez <つまりご存じありたい>で始まる二つの文の最初の方が飛ばされている：「つまり、彼らはとても清潔に暮らし、世界で最美・最良・最大の風呂を持っていることをご存じありたい」）；その規模と数は大したことはないが、恣意的であることには変わりない加筆を犯している；自分が転記しているテキストの意味をしばしば見抜いていない（例えば CXXXV 15: et sachiez que <またご存じありたい>ではなく、意味の通らない et sa que <また知っている>が残されている）；しかし、時には筋の通った訂正を施すこともある（XXVI 12-3: 「この地のキリスト教徒をサラセンに改宗させるか、そうしなければ殺す」。この箇所は他の写本では sarrazins <サラセン人>の後に不可解な contre <に対して>があるが、これはおそらくその前の touz <皆>の影響であろう。LVIII 49: 「この地域の ceux <者たち>もそうする」の ceux は B⁴の追加。LXXII 14: 「個人所有の飼い牛がいる」に対して、この下位グループでは: 「彼らが捕まえた・・がいっぱいいる」。LXXV 73: <香の>ではなく<オンスの>。LXXXIV: <落葉した>ではなく<垂れ下がった>等)。同じことが B³にも言える。コピーとしてこれまた、頻繁な不注意が見受けられる（dates <日付>を tades、aourours <夜明け>を aouras、font <する>を front <前部>、trois pas <3歩>を quatre pas <4歩>、sage homme <賢者>を sa homme <その人>等）；これも、自分の典拠の欠落に新たな小さな欠落を加える（CXLVIII 2: 「l'en <人は>そこを発って」；CLVIII 9: 「また港が c'est <ある>」；CLX 17-8: 「またものすごく大量に ont <ある>」等）；たいていは無視しえるものだが、その改新の中にはいくつか好ましい手直しもある（CXCIII 29: dacles を dades (F: datal <ダッテリ>；CXXXI 36: B¹・B²・B⁴の la de Sindinfu を la province de Sindinfu <シンディンフ地方> (F: [se treuve] l'en a Sindinfu <シンディンフに至る>))。しかしこれら二つの写本に対する我々の興味は、その個々の特性のためよりは、それら同士および同グループの他の写本との関係、すなわちポーロのテキストの変遷の歴史的意味のためである。これらが同一のコピーに由来することはすでに述べた。<足と嘴は赤い> (XXXVI 11) が、B³では<足とそれは赤い>、B⁴では<足は赤い>とあることから、共通の底本として崩れたテキストがあり、それが B³ではそのままになり、B⁴では改善されたと推定することが許される。<彼らの父はまだ生きている> (CLXXX 16) が、B³では<彼らはまだ生きている>、B⁴では<彼らの王はまだ生きている>となっているが、ここでも我々は欠落のある同一のモデルに遡ることができ、B³はそれをそのまま再生し、B⁴はそれに気づいて訂正したのである。逆の場合、つまり B⁴に欠落しており、B³ではそれが誤った読みになっている場合もある（CXXI 2: B³<60>に対して、B¹・B²<20>）。これは、共通の原典に何らかのインクの染みがあっ

たからにちがいない。二つの筆跡の緊密な似かよりは、おそらく部分的にもせよ同じ由来と共通の典拠の近さでもって説明されるであろう。各章の大文字で書かれた冒頭文字の数まで同じである。

下位グループ B³・B⁴・B⁵ の緊密な一致は、何よりもまた余すところなく、下位グループ B¹・B² とは異なる書き込みを共有していることに表われている。

これら二つの下位グループの原本がすでに互いにはっきりと異なっていたことは、2 番目のグループに見られぬいくつかの欠落が最初のグループにはあったり、その逆の場合からだけでも明らかとなる。例をいくつか引こう（イタリック体 [< >内] は写字生が飛ばしている部分）。

I. — XLVI 17-8: 「この町を一つの川が *queurt* <流れている>」 LXIX 44: 「これは他の者に対して長男がするが、*autres* <他の>者はしない」 LXXII 40: 「その両親に自分の *biens* <財産を>たっぷりと与える」 LXXIV 33-4: 「そこは *Soifa* <スワファ> と呼ばれる。狩猟が *Il ont* <できる>」 XCIII 7: 「これら 1 万のうち 1 頭の大きなマステイフ犬を *IP^a que chascun a* <それぞれ持っているものは 2 千人>である」 CLXXIX 17-8: 「彼は王になりたくなかった。Et quant son per vit son filz ne vouloit estre roy <父は息子が王になりたがらないのを見て>」

II. — XIX 20: 「しかとご存じありがたいが、彼らは海に乗り出す *quant* <と>」 XCVIII 12-3: 「良かれと思えるよう *esleu tel* <に選ぶ>と」 CXVIII 7: 「*laurier* <月桂樹>のような葉をした小さな木」 CXLVIII 13: 「マルコ殿はそこに一度に *plus de X^m nefes* <1 万隻以上の船が>集っているのを目にした」 *ibid.* 25: 「皆さんに *di* <言う>がその索は」 CLVI 12: 「彼は *de sa droite mort* <正しい死に方を>したのでないから」

第 1 グループに固有の異読はたいていの場合元のテキストの崩れを表しており、第 2 グループではそれを免れている（以下わずかな例であるが、先に誤った読みを、次に第 2 グループの正しい読みを挙げる）。

IV 3: *La province a aussi a nom Barac* <その地方はやはりバラクという名である> — *La province a aussi a nom Bocara* <その地方はやはりボカーラという名である> VIII 20: *que il lui demandassent a porter* <彼に持ってくるよう頼むように> — *que il lui deussent aporter* <彼に持ってくるように> XIX 30 *estoire* <物語> — *escoste* <護衛> XXIII 18 *viennent* <来る> — *vivent* <暮らす> *ibid.* 29: *entre Il cestes mer* <これら二つの海の間に> — *entre dedens ceste mer* <この海に注ぐ> XXXI 4 *Sarra* <サラ> — *Saba* <サバ> XXXII 22: *Alla* <アラ> — *Ava* <アヴァ> [以下略]

正しい読みが B¹・B² のほうである場合も、それよりは少ないがけっこう数多い（第 2 グループの誤った異読を先に挙げる）。

III 11-12: *il furent grant ost* <大軍だった> — *il firent grant ost* <大軍を作った> XVIII 11 *Cora* <コーラ> — *Coia* <コィア> [ホージャ] L 29: *mauvaise gent du remanant* <残りの悪い連中> — *mauvaise gent durement* <酷く悪い連中> LXIX 34 *lart* <脂肉> — *lait* <乳> LXX 41: *d'un destriers* <軍馬の> — *du derriers* <後ろの> LXXVIII 12: *favourables* <有利な> — *fauconners* <鷹匠> LXXXII 11: *mille* <千> —

dix mille <1 万> XCV 15: chantant <歌いながら> — chacant <狩をしながら>
 XCIX 57: a un seigneur <一人の君主に> — au seigneur <その君主に> CXXI 68: que
 tout ce qu'il aura a l'esperit commande <靈魂に命じる全ての事> — que tout ce que
 l'esperit aura commande il sera fait <靈魂が命じる全ての事がなされるよう> CXLI 6-
 7: clef du royaume <王国の鍵> — chief du royaume <王国の主>等。

両グループの読みが互いに異なり、どちらも間違っているという場合ももちろんある
 (B¹、B³の順)。^{10*}

XXXV 8: ars e tartars <弓とタルタル人> — ars torquois <トルコ人の弓> (F: arc et
 carcas <弓と箆>) XXXVI 20: tartars <タルタル人> — carans (F: caraunas <カラ
 ウナス>) XL 5: qu'il ne puent autre avoire pour le soif <喉の渇きのために他に何も持
 てない> — qu'il ne puent autrement faire pour le faire <それをするために他に何もでき
 ない> (F: <荷獣が大いに難儀して飲む[水]以外>) XLI 19: hacasis <アカシ
 ア?> — harcassiz (F: asisin <アッサッシン[暗殺者]>) ibid.10: et haut ainssi
 comme chastains <栗のように高い> — et est fait aussi comme le chastains <栗のよう
 になっている> (F: <栗のイガに似たイガをつける> LXXIV 15: sasmuel — sasmul
 (F: guasmul <混血児>) CXXI 11: recoivent l'enfant <子供を受け取る> — lievent
 l'enfant <子供を起こす> (F: <子供を産む>) CLXIX 20: se il perissoit <亡くなる
 と> — se il y passoit <そこを通ると> (F: <[人を]捕まえると>) [以下略]

B⁶ と B⁷ は、それを構成するわずかな断片から判断できる限り、上に述べた五つの写本
 から独立しており、上述 2 グループのどちらにも含まれない。またそれらが由来する
 二つの祖本のどちらも、そのどれにも認めることはできない。それら祖本、特に B³・
 B⁴・B⁵ が由来するものに、とても近いコピーのように思える。

B⁷ には、B の番号での 61 章の最後、66 章(間違って 56 と書かれている)と 67 章、
 68 章の最初、69 章の最後と 70 章の最初が含まれている。制作は、テキストの観点から
 はかなりお粗末である。

グループ C によって今に伝えられている版は、B については可能であったとき正確
 さと完全さをもって元の形を復元することはできない。このグループは実質的には C¹ に
 尽きる。

C⁴ は、すでに述べたごとく 2 葉だけからなり、それには第 121 章の最後と 122 章の大
 部分、134 章の最後、135、136、137 章と 138 章の最初の数行が含まれている。この番号
 は FG に典型的なもので、この断片でも用いられている(何故 CXXII ではなく CXXIII と
 記されているのか私には説明がつかない。多分写字生の誤りであろう)。残っているこれ
 らわずかな行は、きっと C¹ より古く多分もっと揃っていたテキストに基づいて作られた
 ものであることを示唆する。C⁴ には「財と人においてとても強大な王だったファクフル」
 とあり、これは F と一致する。一方 C¹ は「大なる財においてとても強大な王だったファ
 クフル」となっており、同じ語句「人と財において」を語順を入れ替えた形に誤って読ん
 だと疑ってしかるべきである。この断片の第 135、136、137、138 章が他のグループの稿
 本においてと同じ番号になっていることも注目値する。C¹ では、アムとトロマンの章

は飛ばされており、その所から番号は通常のものに較べて二つ少なくなっている。C⁴ の番号は、これらの章がグループの祖本には欠けていなかったことの疑いない証拠である。もっとも、C⁴ あるいはその直接のモデルにおいてそうだったと敢えて言うつもりはない。C¹ と C² の対応は次のようなものだからである。すなわち、残った 2 葉に含まれる部分における C¹ の行数と C⁴ の 1 面に含まれている C¹ の行数の間の関係は八つの面に正確に対応している。

C² は、ドリズルによって C⁴ の全くの単なるコピーと断定された。そのことは、C⁴ がルイ 12 世の時代に実際にオンフルール、すなわち C² が属していたグラヴィユの提督の下にあったという事実によって肯定されるかもしれない。しかし、実際直接の関係があったかどうかについてはいささか疑問が残る。C⁴ では、カイドゥ王の戦いの章は大きな欠落によって中断されている：car il savoit que a caracoron es pour retourner en lour contree <つまりカラコロンに・自分たちの地に帰るために・知った>。この es でページが終わっており、es と pour retourner の間に欠けている部分はちょうど紙 1 枚分に相当する。この欠落はまさしく C⁴ の 1 葉の紛失によって生じたのではないかと疑ってしかるべきである。ところが、C² は (C³ と同じく) この点で次のようにある：car il savoit que a Caracoron estoit Nomagon <カラコロンにノマゴン [ノムガン] がいることを知ったから>。この加筆は、文脈からは暗示されえないし、少なくともファクシミリから結果するかぎり、C¹ のいかなるページ送りによっても正当化されえないものである。C² は pour ce que nos veismes tous nudz en ce monde であるが、C¹ は文字を省かずに pour ce que nos venimes tout nu en ce monde <我々は皆この世に裸で生まれて来たのだから>とあり、これは C² のモデルで言葉が短縮されていた証拠である。同じことが、C² の leur langage leur lart et leur escripture に対する C¹ の leur langaige et leur latres et lor archaier <彼らの言葉と文字と書き方>、C² の qui vous verra に対する C¹ の que il vos verrai <私は皆さんに望みたい>についても言え、文字を略していない。C³ も考慮に入れると、C¹ : royaume dely, C² : royaume de ely, C³ : royaume deoly <エリ王国>のような例が目には止まらずにはいない。最後の二つは、C¹ とは異なる一つの似通ったモデルを考えさす。C¹ では si dirent que il porroient bien demorer dore en avant por retorner とあるところで、C² と C³ は正しい読み demourer trop <余りに遅くなる>を有している。ともあれ、直接 C³ に基づいたのではないにしても、C² はそれとほとんど同じテキストをモデルとしている。コピーとしては、あらゆる点で最悪である。全てが非知性的な性急さを示している。例えば f.68 に「グラン・カアンが国民になす善行について。また本当にご存じありがたいが君主は、国民が困窮していないか知るために自分の全領土で使者が通行する主な街道全てに・・を命じた」とある。第 XCVIII 章を写し始めたのだが、次の章がほぼ同じように始まる（「またご存じありがたいが大君は」）ものだから、sire <君主>の後次の章に飛び、ほとんどすぐ後のやはり共通する別の 2 語 ses messages <自分の使者>にまたもや勘違いして、すぐ前の章に戻っている。さらにもう一例で十分であろう：C¹ 「数種のオウムがおり、touz blans come nois <我々のように真っ白で>、嘴と足は赤い。Et si en y a aussi de vermaz et de blans <また赤と白のもおり>、この世で最も美しい見ものである」、C² 「数種のオ

ウムがおり、tous blancz comme noirs <黒いように真っ白で>、嘴と足は赤い。Et blancz <また白く>、この世で最も美しい見ものである」。

C³ は、これも私には C¹ の直接のコピーとは見えないが、その異なりはそれに何らかの自立性、いかなる補完的な価値を与えるほどでもない。より新しいスタイルで書き直された C¹ であり、ちょっとした削除がより多くあり、時に控え目な拡大がいくつかと、とりわけ多くのしばしば奇妙極まりない勘違いがある。そのことは、何よりも後世の写字生にとって分かりづらいものとなった典拠の古さを証している。その特徴を示すには、とんでもない誤りのいくつかで十分であろう（C³ - C¹ の順）^{11*}：

I 22 : extraire <引き出す> — retraire <書き記す> XV 14 : servi devant tous <皆の前で仕えられた> — servi et honorez de toz <皆から仕えられ誉れ高く遇された> LXI 8-9 : par costes les montaignes <山の中腹に> — par tote les montaignes <山全体に> LXIX 4 : <他の何人かと彼の前にいた者> — <彼の前にいた他の 5 人のうちの何人か> LXXVII 11-2 : <彼は常に軍事の子供だった> — <彼は常に軍事に携わっていた> LXXXIII 2 : <彼の 4 人の妻の長男は 12 人の男児がある> — <グラン・カアンは 4 人の妻から 22 人の男児をもうけた> LXXXIX 1-2 : au bout de l'an <年の終りに> — au chief de l'an <年の始めに> XCVII 6 : noyers <胡桃の木> — mouriers <桑の木> CVI 17 : cousture <継ぎ目> — colone <柱> CXXI 32 : <十字型の 2、3 の切れ目> — <2、3 の刻み目をつける> CXXIV 21 : vertueusement <徳高く> — fierment <激しく> CXL 5-6 : <彼は美女を抱えて快楽を果たすこと以外関心がなかった> — <女性のことと貧民に慈善を施すこと以外> CLXXVIII 59 : <この夜の飲み物を子供の時から用いる> — <これを子供の時から用い始める> [以下略]

C¹、あるいは別の言葉でいうと、その中に最も完全に純粋な表現を宿しているグループは、研究者によって余りにも好意的に評価された。L. ドリズルは、「このテキストの基盤は書き直しと削除を被った」ことを認めるが、「その手直しと削除は、写本 5631 と 2810 におけるよりずっとささいなものである」と付け加える。実際は、他のグループに対する C の特色は、ポーロの書がまさしく削除と要約を通じて一貫して大規模な縮約を被っていることにある。様々な文章において必ずしも厳しく必要でない各要素が捨てられているのみならず、さらにまた解説的な意見、要約的な箇所、注釈と場面移行の語句がことごとく消え去っているのみでなく、重要な事実や細部が切り捨てられており、FG の他の稿本と系統的に対校すれば、かなり目立った偶然でない欠落が極めて数多いことが分かる。内容のこのひどい貧しさは、そのモデルがこの家族の原本に近いことと、短くするという必要が写字生に課した大きな合理性によって償われている。分かりにくいというだけで余りにも多くのことが写字生によってあっさり切り捨てられている。しかしいくつかの箇所は保存され、その原初の正確さの中に残っている。我々がすでに見、また他の多くの例で確認したごとく、その中にはっきりと B と対立するいくつかの崩れ—— D・A と共通する——がある一方、D・A から離れて B と一致する場合も少なくはない。しかしその価値を誇張してはならない。同じ系の双子であるが、より長い一連の中間写本を経ている A と D は、言語的観点からは疑いもなく保守性において劣り、極めて頻繁により崩れているが、

本質的により揃っている。C にもまた、これを用いようとする者に最大の慎重さを課す、嘆かわしい変形が欠けてはいないし、それらはもっぱら C 独自のものである。(単に F と対校したのではその誤りを説明するに十分でないときは、訂正を括弧内に記す^{10*)}。

IX 6 : Et quant li III mesaige furent bien a acree 「3 人の使者がちょうどアークルにいたとき」(F : Et quant meissier Nicolau et messier Mafeu et l'autre mesages furent bien aparelies 「ニコロ殿とマフェオ殿ともう一人の使者の支度がすっかり整うと」) XLVII 34 「貴頭の男性は錦をまとう」(F 「上流や貴頭の女性はズボンをはく」) LXXVII 8 「7 日来させる」(F 「ある日チンギス・カンは来させた」) LXXV 37-8 「彼と共に勝利したため、かつてグラン・カアンがその王を賞讃した一種族以外」(F 「かつて彼と共に勝ち取った勝利ゆえに、チンギス・カンがこの誉れを授ける」) LXXXV 27 「かくて一つの門から別の門へ真っ直ぐに進む」(F 「どの門も他の門と真正面に相対している」) XCIII 7 「これら 1 万人のそれぞれが 2 匹かそれ以上の犬を持っている」(F 「これら 1 万のうち 2 千人がそれぞれ大きなマスティフ犬を持っている」) XCIV 27 「全軍の最も高いところにいつも鷹がいる」(F 「全軍の最も高いところでいつも自分の旗を立てている」) XCVI 17 「少なくとも自分の体を使う者が 2 万人以上いる」(F 「金のために男に全てをまかせる者が 2 万人もいる」) ibid 17 「次にこの都市で君主が有している権力のことを述べよう」(F 「次に二つのこと、造幣局とこの都市で造られる貨幣について述べよう」) CXXV 14 「インドの島である」(F 「インドとの境界にある」) CLXVIII 5 「また言うておくが、北極星も我々がポヌモワールの星と呼ぶ北西の星も」(F 「また言うておくが、北極星は小さくも大きくも姿を見せない」) CLXXVII 45 「ある場所に」(F 「ヌビアに」) CLXXX 16 「また別のやり方を持っている」(F 「彼らの母親はまだ生存している」) CXCVI 54 「インドには馬なしでいくことのできる 12,800 の島がある」(F 「インド海には人の住む住まぬ合わせて 12,700 の島がある」) [以下略]

次の二つの興味深い発展もこのテキストだけのものである。もちろん写字生の空想によるものであるが、この版が作られたときの簡潔さと真面目さという基準にけっこう反している。

LIX 23 「君主はこの国の女性の大多数を御前に呼び寄せ、この風習がさらに続くことを望むかどうか尋ねた。すると彼女らは、自分たちの良き習慣を失うくらいなら死ぬほうがましだと答えた。で、そのため男たちは大いに喜んだ」^{12*)}

XCVII 48 「この大君の下にある大なる力と大なる国々のことを十分に考えられる者にとっては、それを信じ理解するのは容易なことであろうが、そこに行ったことがなく世界の様々な事物を目にしたことのない者にとっては、知らないことを理解するのはやはり無理であり、信じるのは困難である」(F : 「グラン・カアンの紙幣」についての章で、「もう一つ大変なことを皆さんに言うておこう。この世の君主を全て合わせてもこの大君が有しているほどの富は持っていないのですぞ」)^{13*)}

D の中に混交テキスト、つまり C と A の影響が見られていたことはすでに述べた。しかし、そうした解釈は根拠をもたない。D が、それに比べて内容的にはるかに少なくなっている C から由来することはありえない。モノとしてそれより古いから A からというこ

ともありえない。もちろん FG と A¹ を直接つなぐものを主軸と見なすならば、それに対する D の位置を定めるのは簡単ではない。次の両方と否定しがたい似か寄りをもってはいるが、C にも A にも含めることはできない。しかし、D・C の一致が特殊な関係の証拠となるためには、その点で A が、常にそうであるように、C・D・A のグループ特有の後代の崩れた読みではなく、そのグループの純粋な読みを提供することが必要であろう。一方 A と D の間には、A の原本と D にとって共通のオリジナルを設定することが許されるような対応がある。章の数は同じであり、見出しもほぼよく似ている。C にはない共通の欠落がある（例えば LVI 5-6 「コートンからペムまでも沙漠である」を欠く）。特徴的な共通の誤りがたくさんある（<家畜で vivoient 生計を立てる>が venoient <来る>、<トルコマン人の province 地方>が quantite <数>、chault lieu <暑い所>が haut lieu <高い所>、asnes sauvaiges <野生のロバ>が oes sauvaignes <野生のガチョウ>、ost <西>が est <東>、les fait dormir avec eles en un lit <一つのベッドに彼女らと一緒に寝かせる>が les fait dormir en son lit <自分のベッドに寝かせる>、等）。D は、A より古く多くの個所でより保守的で正確だが、全体としてこれに劣る。A に対しては C と同じ関係にある。つまりこれまた、より小規模でだが自由で個人的なコピーで、見落としが頻繁で、削除と要約を欠かない。ごくまれにだが、C でと同じようにこのグループの間違った読みがいくつか訂正されている。例えば、「最初に voient <見る>ものをその日崇拝する」と正しく書いているのは、C・D・A グループの中でこれだけである。

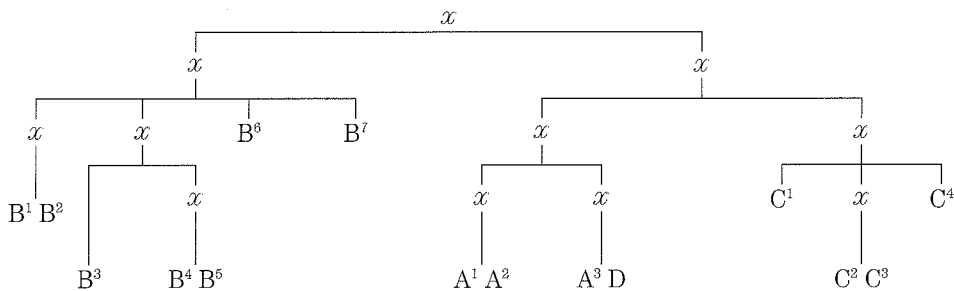
グレゴワールの改作から生まれた様々な稿本は二つに大別されることはすでに述べた。我々が今取り組んでいる 2 番目のグループでは、正確を期すために C と D の特殊な個性を区別し、その結果それらに特別の名前を与えなければならなかったが、これらがこのグループの他の写本と緊密に結びついていること、それに共通のテキストの転記であり、そのテキストはそれは A¹・A²・A³ によってより機械的・忠実に、かつより完全に今に伝えられていることを忘れてはならない。

A³ と D は同一のモデルから来るにちがいない。A³ が D と共有するのは、A³ を A¹・A² の兄弟としている類似と比べればわずかなものであるが、共通の典拠を確信さすに十分である。別の言葉で言うと、D の異読のいくつかは、D が由来するコピーにすでに遡るにちがいないが、しかしその性質と数は、そのコピー自体と他にあるかもしれないその派生本に、伝統的な読みのけっこう忠実な再生であることを妨げないようなものである。すなわち、固有名詞の崩れは A³ と D ではしばしば同じである。原本の疑わしい言葉を同じように変える：「またこの橋の上には君主の税金が徴収されるグラン・カアンの certaine maison <ある建物>がある」（Pauth. P.369: le couvert <屋根>、F: comerque <税関>）。このグループの読みを同じように変える：「これを ne le beniront <祝福せぬ>者は皆死ぬであろう」（Pauth. p.255: ne l'obeiront <従わぬ>、F: idem）。誤りを同じようにさらに悪化させる：comperes <異なっている>を comparez <似ている>（Pauth. p.76: comperes, F: devise <異なっている>）。ともに同じ誤解がある：「これから私がお話する 3 日行程 en <で>」（Pauth. p.62: a <のところに>、F: trois jornee plus avant <3 日行程先に>）。結構古い稿本の新しいコピーであり（いくつかの誤りが明らかに示すごとく）、

ある点で $A^1 \cdot A^2$ より完全であり、テキストの歴史のために何らかの興味はあるが、この写本はしかしながら内的な価値はほとんどゼロである。コピーには馬鹿げた点が散在している。地名や技術的な個所は好んで避けられている。物質的な自立性は、短縮と削除においてこれを結構簡潔なものとしており、追加はほとんどなく、文体的改新という最初の計画に余り忠実でないが、いくつかの大きな欠落の原因となっている。³³

$A^1 \cdot A^2$ については、ポーチェの出版とそれに対する批判によってなされた正しい指摘のおかげで、簡単にすませることができる。これらが同一のコピーから派生することは疑いない。その似かよりは、モノとしてより新しい A^2 が、 A^1 が欠落している一箇所以上で揃っていないければ、 A^1 の単なるコピーと考えてもよいほどである³⁴。以上からして、このどちらかに対するポーチェの気ままな好みに常に従わなくともよいことは明らかである。同じグループの他の写本と対照することによって、これら二つの一つがいつまたなぜ新しくなったかが示される一方、問題を真に本質的なもの、すなわちこれらが属するグループの、B に対しての評価へ導くことが可能になる。³⁵

以上駆け足で行ってきたこの検討の結果を、というよりそこから得られた推定をより簡潔にまとめるために、それを系統図に要約する。ただし未知のものについては、最小限必要と思えるものだけを記すが、今日失われた中間写本はさらに数多いことも排除できない。



6. このグループの全体的結論

FG の研究は、どうしても晴らさなければならない有害な思い違いが今なおポーロ研究に垂れ込めているのでなければ、無益な知的遊戯であろう³⁶。すなわち、FG は F が「直接」見直され訂正されたものではないということを証明する唯一の方法は、 F^1 がどうであったか、そしてそれに対してかの改作者がどのように振舞ったかを可能な限りはっきりさせることである。

F と F^1 が共通の誤りをいくつか有していたことは疑いない (XXX 13: tauriz <タブリーズ> は TA から taurizins <タブリーズ人> と訂正できる; LXIX 35: les plaines desote <荒野> は F 自身の CCXVIII 19-20 からして d'estee <夏の> であろう³⁷; CLIV 23: quindici milioni <15 百万> は quattordici <14>; CLXXIX 82: Adam <アダム> は Borcam <ボルカン> [釈迦]、等)。どちらもいくつか特徴的な欠落がある (X 5: 教皇

の名が空白になっている。LXX 38-9: モンゴルの軍隊組織に関する用語が欠落している。LXXXVI 49-50: VA には残っている句の断片が飛ばされている。CCII 29: TA には見られるプマールの王の名が空白になっている³⁸、等)。F では enperaices <皇后> (cfr LXXXII) を eporaices と誤っており、グレゴワールにより近いグループの一つ、すなわち B には esporaces とある。

F で明らかに崩れている多くの個所は、FG に探しても見当たらないか、あるいは大きく短縮されている。グレゴワールが前にしていたものにも F のとおりあったのだが、その困難を解決できずして削除する方を選んだと疑っても何ら不当ではない。コカチン姫とともにアルゴンのもとに送られたマンジ王の娘についての長い個所 (XIX 33-52) は、ポーチェによれば、マルコ・ポーロが必ずや「余りにも個人的だとして削除した」個所であるが、それよりはおそらく、突然——私が間違っていなければ——最初一人だけだった花嫁を二人に置き換えれば、読む者に混乱をきたすことを危惧したからにちがいない。たくさんの方の明らかに誤っている表現を御覧になりたい。それらを、最後の写生字である私自身が、テキストの中で何らかの形でそれに換えて脚注に訂正しなければならなかったし、もしマルコ・ポーロが校訂者であったなら、もちろん彼も元の正しい形を与えることをせずにはおかなかったであろう: XXVI 6, XXXI 6, XLIII 15-8, XLVI 14, 16-7, LXX 67, LXXIV 15-6, CXIV 9, CXVIII 18 etc. グレゴワールはこれらを見事に削ってしまった。彼が敢えて訂正しようとした点もいくつかある (例えば XLI の注参照) が、彼の訂正は余りにも自明なものであり、彼が用いた写本が今に伝わる他の写本よりいいものではなかったということの更なる証明を提供しているだけである。

もちろん、F と FG との異なりを全て F' と F との違いと見なすことはできない。グレゴワールが誤解したかあるいは勝手に変えたかしたことはありえないところでないからである。グレゴワールが、もし理解したならば F と同じ読みを与えたにちがいないと思われるケースは、私には数多いと思える。例えば以下を見られたい (FG-F の順): XXV 3: le siege du pape des crestiens <キリスト教徒の教皇の座> — les cies de tous les cristiens <全キリスト教徒の長>; XXV 26: le te vueil donner a mengier sicomme le tien meismes <汝自身が持っているようにそれを汝に与えて食べさせよう> — le te voi doner a mangere le tien meesme <その汝のものを汝に与えて食べさせよう>; XXXV 11: coustes (B1・B2: coletes, D: keutes) — coltres <カヴァー>; XXXVII 22: cestours — ce sont toin <すなわちマグロ>; XLVII 3: si regnent <統治する> — se roit <王位に就く>; C 5: tempeste <嵐> — grillis <イナゴ>; CLIII 41: instrumens <器具> — tailloures <テーブルクロス>; CLXXV 78: enfans <子供> — feoilz <忠臣>; id. 108: charrete (C: chartre) <車> — caiere <椅子>; id. 127: suif <脂> — oisci <糞>^{14*}; id. 166: estourni (estournel) <ムクドリ> — estornu <くしゃみ>; CLXXVIII 67: les os du buef <牛骨> — le oisi dou buef <牛糞>; id. 102: parfais ydolatres <完全な偶像教徒> — perfidi ydres <邪悪な偶像>; CLXXII 7: si y a moult granz palus et granz plantains a mervuille <びっくりするほど沢山の沼と大木がある> — il hi a gat paul si devises que ce estoit mervuille <びっくりするほど様々な猿がいる>;

CLXXXII 7: giroffes <アラセイトウ> — giraffe <キリン>; CXCH 18, CXCHII 13, CXCIV 91: ours <熊> — lonces <山猫>。このフランス人改作者にとって、自分の原典のフランス・イタリア語が往々にしてなんと解し難いものだったことは明らかである。例えば XL 10: ricci <金持ち>のようなはっきりとしたトスカナ語をいくつか訳していないことは、その意味を追求しなかったことを示しているように私には思える³⁹。そうした言葉をそのまま残したのと同じ理由で、他の余りにもイタリア語的な用語をおそらく避けたのであろう: 例えば pat (= patto <条約> CLXI 29), quae (= quaglia <鶉> CLXXV 174), aspre (ジェノヴァ銀貨 CXI 8)。F と照らし合わせると、FG のいくつかの文ははっきりと誤った解釈であることが分かる: XVI 5: sot de IIII lettres de leur escritures <彼らの書き方の四つの文字で>; XLVII 34: les grans dames et les gentilz hommes <上流の婦人と貴族の男たち>; <我々は同じような暦をもっている>; <外も内も全て緑である>; <彼らのお金は金でできている>——<金が彼らのお金である> (つまり鑄造貨幣ではないこと、この違いは大切である); <この都市の市民とそこに住む者全て>。いくつかの間違ひは単に読み誤りによるものである: reobar les <レオバル、その[果物]>が reobarles <レオバルレ>; poil <毛>が pie <足>; aler desout <下痢をする>が aler de route <道をたどる>; feutres <フェルト>が (明らかに funes <綱>と読まれて) cordes <綱>; uies <慣習>が vies <暮らし>; di XXII jors <22 日の>が dix ou douze jours <10 日か 12 日>; lairons <盗賊>が barons <封臣>⁴⁰; coulombes de fust de pieces <香料の木の柱>が colonnes de leign d'espices <木の柱や[虎の皮の]断片>; comerque <税関>が couvert/comiert <覆い>; en la souce de l'aille <ニンニクのソースに>が en souc que il font d'yaue chaud et d'espices <熱湯と香料で作るソースに>; <布を裁断したり塗ったりするための裁断工や縫製工の ne a mester 仕事はない>が n'a mestre <親方はいない>。

全体としては今我々のもとにあるテキストと同じであるが、F¹ はその固有の特徴をもっていた。

FG が呈する全ての欠落について、それが改作者かそれとも F¹ の写字生に帰されるべきか、絶対的な形で決定することはもちろんできないが、F¹ にいくつか特殊な欠落のあることは、グレゴワールのいくつかの明らかな誤りを説明しようとするとき、どうしても我々が拠らざるを得ない前提である。F の IV 12: 「2 人の兄弟は彼に、elle soit chouse que il le peusent fair <それは自分たちにできることだ>から、喜んで信用すると言った」は、FG では「自分たちに言われていることを喜んで信用するであろうと答えた」となっている。これはおそらく、F¹ ではイタリック体 [< >内] の語句がすでに欠けていたのであろう。F の CLXXVII 「それは il ne naiscent <生まれたとき>よりはるかに黒くさせる」は、FG では「かくて悪魔のように黒くなる」となっているが、その国民のもとでは悪魔は「雪のように白い」と記されていることからして、この文脈では考えられない表現であり、イタリック体の言葉が抜け落ちたことでもって説明がつく。また、F の CLXXVIII 25-6 「何らかの商品を商う必要が生じると、それを買いたい者は en estant <すぐに>起きる」に対して、FG では <朝服を着るとき>とある。これは、en estant が抜け

落ちたと考えるだけで十分な奇妙な誤りである。

一方、コピーとして F¹ がけっして F に劣っていなかったにちがいないことを納得するには、我々のテキストにざっと目を通すだけで十分であり、FG はこれに正確な読みと確かな補いを結構頻繁に提供してくれている。個々の訂正は、F では欠落していたり間違っているいくつかの個所で、より大きな忠実さと完全さでもって償われている。⁴¹

もし F¹ の厳密で正確な転記であれば F の貴重な補完となったことであろうし、これらの写本から復元できる改作版にも、その改変にもかかわらずある種の価値が残っている。しかしながら、実際には我々は改作された一コピーを前にしていることを忘れてはならない。新しい転記とそのモデルとの差を正確に測ることはできないのだから、かの正体の分からない転記者のものであるものをマルコに帰せしめないよう最大の注意を払わなければならない。例えば、以下の F の文をポーチェの対応する個所と対照されたい：IX 10-11, 14-15, XVIII 21-2, XXV 32, XXIX 11-3, LII 20-6, LXV 26, 33, 59-60, LXXIX 33-6, LXXX 10, CVIII 12, CIX 5, CXVI 17-8, 48-9, CXX 44, CXXI 58, 60, 67-8, CXXIV 21, 40, CXXXV 30, CXL 54, 67, CXLII 24, CLIII 41, CLXXVI 34, CXC VIII 14。FG のより分析的でより普及した文の中に、オリジナルの読みか単なる文体的拡張か、どちらを見るべきであろうか。バグダードやサマルカンドの奇跡を物語るなかで、F にはない細部を記したのはルスティケッロだったか、それともグレゴワールか。問題は解決不可能であり、これらの点でグレゴワールが他のどのテキストによっても裏付けられていないからといって、それを決定するに十分ではない。もちろんグレゴワールは自分のモデルに対して何ら盲目的崇拜はもっていないし、それをよくしようという危険な幻想が結構透けて見える⁴²。すでに述べたごとく、全体として結構忠実ではあるが、その忠実さの結構様々な程度の気まぐれをほしいまにしている。移し変え、端折り、削り取り、しかも時に著しい。二度編まれたという説を信じるなら、また我々の目にとっても FG が「自分の部屋で、牢獄では得られない自由でもってなされた、最初のジェノヴァでの書き下ろしの落ち着いた再編集、科学的にも文体的にもかの旅人の最後の思想を表す改訂版」と見えるなら、これらの異なりも注目値するであろう。しかしまさしくこれらが、我々が闘っている説に反対する最も強力な論拠の一つなのである。ポーチェ自身、FG になんか説明しにくいいくつかの個所の重要性に気づいていた。F の第 CLXXIX 章 29-42 行が FG に見当たらないことに驚いているが、それは仏陀の話がそのドラマチックさと美しさを保つためには真に枢要な部分なのである。⁴³

もっとも、ポーロのオリジナルの復元にとってその作品の内的な価値がどうであろうと、グレゴワールは敬意と榮譽をもって記憶されるに値する。我々が旅人の書がアルプスの向こうですぐに結構広範な成功を得たとすれば、それは彼のおかげだからである。他の特殊な版はマルコの作品を教養人と民衆のもとで生きづかせた。グレゴワールの版は貴顕や君主といったエリートに受け入れられたのだった。美しい物語のように愛された。この家族の稿本は、モノとして最も美しい部類に属する。これらの大部分に美しく描かれている細密画のことを考えると、戯画的や空想的な題材の傍ら、波乱にとんだ航海やはるかな冒険の意味がその中にいかに表現されているか観察するのは興味深いことである。

結び^{15*}

我々がこの仕事に取り掛かったとき、ポーロのテキストの歴史と呼べるようなものは何もなかった。今に残っている材料の系統的な探索はまだ誰によってもなされていなかっただけではない——だから我々はコルディエによって挙げられていた 78 の写本⁴⁴にさらに 60 ばかりを加えることができたのだが——すでに知られている記録を、それらの間の関係を明確にし、オリジナルに対するその価値を客観的に確定するべく、方法論的に批判的な検証のもとに置くこともなされていなかった。一つのポーロ問題、すなわち対立する多くのテキストのどれにマルコの本当の言葉を見出すべきか、については認識されていた。しかし、今に伝わる稿本の全体に解決を求め、それらを超えて何らかの失われた版に遡ることは、必要であったにもかかわらずなされなかった。出版によって身近なものとなった三つか四つのものの中から、最も優れていると思われる一つを選べば十分だと考えられていた。ポーロ研究に支配的な考えは、こうした一貫性を欠くヴィジョンの当然の反映だった。これに先立つページの中で徐々に我々は、いまや公理にまでなったいくつかの忌まわしい見解を根こそぎにする必要に迫られた。すなわち、パリ国立図書館写本 fr.1116 はジェノヴァの獄で作成されたオリジナルと当然みなしえるものである；ポーチェが自分の出版の基礎に用いた諸写本はマルコ自身によってなされた改訂を表している；現存するポーロの版は全て直接あるいは間接にいわゆる地理学協会テキストから派生している；いわゆるラムージョの追加は、つまるところ厄介で邪魔な付属品に過ぎないが、それがポーロの手になるものであることを絶対的な形で退けることはできないから、用心のため何か補遺に追い遣っておけばよく、fr.1116 と対立するところは全てははっきりと偽文として考えるべきである、といったものであった。ユール自身、つまりより生き生きとした情熱とより明快な直感でもってポーロ問題に取り組んだ人物、写本のリストを自著の第 2 版から削除することによって、この分野での自分の予備調査の不十分さを理解したことを示した彼までが、共通の偏見に取り付かれたままだった。その翻訳が拠って立つ経験的折衷主義は、様々な支配的仮説を、根拠付けることもそれらの対立を乗り越えることもせず、そのまま受け入れたのである。地理学協会テキストが最初の純粋な編纂に沿っていると深く確信し、ポーチェのテキストがそれより優れているとは何ら心底から納得することのないままに——だからこそ、改訂があったとすればそれは表面的で不完全のものだったにちがいないことを認めざるを得なかった——後者を底本として採用した。また彼は、ラムージョは偽文者ではなく、失われた諸写本を活用したと深く確信していた。にもかかわらず伝統的な先入見に敬意を表して、それ固有の新記事の中にはマルコが自分の書に付け加えたかもしれないその時々への補足を見るに留まり、F より彼方には視線を延ばすことはできないと信じ込んで、F とラムージョが用いた諸稿本がひょっとして共通の親の単なる派生物であるかどうかを自ら問うことはついになかったのだった。

今に伝わる全ての版を客観的に分析し、放ったらかしにされたり知られぬがままになっていた膨大な材料へ調査を拡大することによって、我々は根本的に異なる問題設定と予期せざる解決へと導かれた。事実の単純な論理が我々に打倒することを可能にした数多くの

執拗な誤りを振り返ることはさて置き、我々が到達したと考える新たな積極的な結果を簡単にまとめよう。

現在知られる写本のどれも、ジェノヴァで編まれたものの純粋で単純な再生物と見なすことはできない。

かの作品は、明らかなことだが、最初ルスティケッロ・ダ・ピーサによって与えられたフランス語⁴⁶の姿で広まった。その直接の記録は、fr.1116 とコットン断片の二つだけである。しかし、その普及はけっこう著しいものであったことが確信できる。なぜなら、ポーロの他のテキストが全てすでに他の言語への翻訳か書き換えであったとすれば、それが翻訳であること、そして何らかのフランク・イタリア語稿本からの翻訳であることを証明することができるからである。写本の大多数を系統樹的に再整理し、最初の明快なグループ分けからますます広いグループに遡っていくことによって、一つのフランス語原本に基づいて作られた限られた数の祖本を特定あるいは復元し、それら祖本自体を通じてその失われたモデルを推定することができる。こうして我々は、もはや二つのテキストではなくただ一つのテキストを前にすることになる——なぜなら、目下のところ F はポーロの書のこの最初の形を比較的完全に証言する唯一のものだからである——。しかし F の仲間は少なからざる数であり、推定によってそこに以下のものを付け加えることができる。二つの異なるラテン語版モデル、三つの異なるヴェネト語訳モデル、一つのトスカナ語訳モデル、一つの良いフランス語への改作モデル、一つのカタラン語訳モデルである。これらは全て、すでに示したごとく一つのフランス語オリジナルに由来する版である。今に伝わる二つのテキストの間に横たわる深い異なり、したがって上に挙げた翻訳の特徴的な差異は必ずしも全て翻訳者の責に帰せしめられないという蓋然性、F 自身がすでに被っている否定し難い手入れ、これらもまた、かのフランス語の姿で広まったものが深刻な改変を免れられなかったに違いないことの証しでありえる。それは物語的なテキストが、とりわけもし芸術作品でなく自らの美しさの意識的なシンメトリーによってある程度保護されていないときには、常にさらされているものである。

その成功は、我々の目にはその証拠と写るこれら翻訳そのものによって、とりわけ VA と、VA からの派生のうち最も名高いものすなわち P によって、しかもけっこう早い時期に止められたにちがいない。

パリ国立図書館の fr.1116 は、形式においても内容においてもジェノヴァの原本からすでにけっこう遠い一本である。

この我々が知る唯一のフランク・イタリア語稿本の中に、ルスティケッロのフランス語がそのまま残っていると幻想を抱くことはできない。パリ国立図書館の fr.1463^{16*}、コットン断片、Z や V という翻訳を通じて元の読みを垣間見ることが可能なそのモデル、これらとの対照は、中世のテキストがどのような形式的揺れを被ったか思い出させるに充分である。しかしながら、被った変貌がいかなるものであれ、形の上で失われたオリジナルに最も近く、言語の観点からその影を留めている稿本は、目下のところこの F である。また、その言葉にヴェネト語の基層の見られるものがポーロに由来するのであれば、かの旅人の実際の言葉を最もよくこだませているテキストもまたそれであることを付け加えられ

たい。これだけでも F は、マルコ・ポーロの遺品の中で名誉の地位に値する。また、今日では手に入れることは不可能であり、文献学的にも使用に耐えないルーの古い版^{17*}に代えて、それにふさわしい新たな版を提供することが必要だった。

形の上で F よりも保守的なフランク・イタリア語コピーの存在を証するテキスト自体が、さらに完全なもののあったことをも証明している。しかしながら、もし F の純粹で単純な一つの版がまだマルコの書の版ではないのなら、また、祖本に到達するには、転記者の不注意か恣意によって奪われてしまった少なからざるまた短からざる部分を F でもって埋めなければならないのなら、現在我々がもっている稿本の中で、内容の点からも全体としてオリジナルテキストに最も近いのはやはり F である。今日写字生による手入を修復することを我々に可能にさす諸稿本は、たとえ個々の点ではより完全であっても、全体としてはより断片的である。Z は不完全な形でしか伝わっていないし、Z¹ はラムージョがそれでもって自分の刊本を豊かなものにした散発的な「抜き書き」を通して知られるのみである^{18*}。L は全くの要約だし、V はひどく崩れた後世のただ一つのコピーの中に伝えられているにすぎない。

我々にとって今ある材料から可能なマルコ・ポーロの科学的な版にあつては、F が基本的な核となることはしたがって避け難い。必要なところで F を補うために、他の数多くの重要な保守的要素が、残りのポーロ版からそれに加えられなければならない。しかし、それら様々な要素の外面的な立場がどうであれ、もしその仕事が実際にはっきりと異なる二つの部分、一つは F の版、もう一つは祖本を補うためにそれに欠けているもの全てを残りの写本の伝統の中に求めること、この二つに分かれるかに見えようと、またたとえ莫大な量の稿本が実際的に二つの大グループ、つまり F を確認しそれによって証言されている局面に尽きるものと、それ以前の一段階の存在を記録しているもの、この二つに分かれるかに見えようと、唯一の方法によってのみ解決可能なこの唯一の問題に直面していると感じない者は、その目的に全面的に失敗するであろうし、F の適切な版にもその補完物のもう少し確実な収集にも成功しないであろう。研究の現状では、マルコの書の真正な版はポーロのテキストの歴史、別の言葉で言うならばその原初の全体像の探求以外ではありえない。それは唯一の基盤、上に述べてきた何世紀もの写本の伝統が全部まとめられ詰まっている祖本の小グループの上に立って作業を進めなければならない。全く知られなかったマルコ・ポーロの多くのページを何世紀もの没却から救い出し、誰の手になるのか疑われていた多くのページを確実にポーロの誉れに高めることを可能にしたその同じ基盤は、F を出版する者にも別の形で、マルコの考えに再び生命を与え、写字生が削ったりゆがめたりした無数の文に意味を回復するのになかった手段を提供するのである。

この後に続くテキストが、この「序」がそれでもって閉じる大胆なプログラムの正しい実行となっているかどうか自らに問うとか、あるいは博識の読者に問うことは我々はしないであろう。この序とテキストは本書では不可分の一体をなしている。ただ一つの同じ解決の外見上のみ異なる表現であり、その内的本質において判断されるべきである。失われて何世紀もの後マルコ・ポーロの真の作品、マルコ・ポーロの〈全〉作品を再発見するという野心的な企てに初めて取り組むことによって、それがいかにして可能かを事実でもつ

て示そうと試みてきたし、またそれら事実そのものを過去の誤ちとありうるかもしれない今日の不信に対して護ってきたのであった。

題材の順序と展開は、こうして取り組まれた試みの新しさ自体から自ずと決まってきた。この最初の補完版では、失われたオリジナルがそれでもほとんどモザイク状に再構成されることになる様々な要素が、それらが今に伝わっている言葉と形において区別して残され、読者に提供されている。しかしながら、誰が奇妙なロマンス語学者が、異なる材料に再びしかるべき言語的統一を与え、それを一つの現代語訳に溶け合わされんことが期待される^{1*}。それこそが『ミリオネ』の最初の本物の訳となろう。

もちろん我々は、我々の中心テーマと強い関係にある問題のみに止まった⁴⁶。しかし我々は、本書は我々にとっても他の人々にとっても、新たなはるかに多様な研究へと進むべきドキュメント的な基礎に過ぎないと信じている。そして、もしこれがポーロ研究における新たな実り豊かな熱意の始まりを印すことになれば、我々の労苦は立派に報われたと考えたい。[完]

- 1* Marco polo, Il milione, prima edizione integrale, a cura di Luigi Foscolo Benedetto, Firenze Leo Olschi 1928, 'Introduzione: La tradizione manoscritta', Cap. II: Il rimaneggiamento di Grégoire (FG), pp.LXVI-LXXIX & Conclusione, pp.CCXVIII-CCXXI (1)-(5) はそれぞれ『大阪国際女子大学紀要』24-2, 25-1, 25-2, 26-1, 27-1号、(6⁻¹) は『国際研究論叢』16-2号。原著の解説は、拙稿「ルスティケッロ・ダ・ピーサ——マルコ・ポーロ旅行記の筆録者」前掲紀要24-2, 1998, pp.1-48, 参照。原典からの語句および文の引用には、適宜原文とその和訳もしくはその一方を付けた。引用例を省略した場合は、[以下略]等と記した。原註は大幅に省略・要約した。〈 〉内は引用文中イタリック体の個所。[]内は訳者補足。*は訳註。ローマ数字は上記ベネデット校訂版Fの章、アラビア数字は同行(es XVII 3-5)。

原註

32. 今まで何故 B³ が B⁴ の単なるコピーと考えられたのか、私には分からない: cfr. Yule, op. cit., II, 547, Langlois, art. cit., pp.251, 253.
33. 例えば、ポーチェの p.448 l.13 から p.550 l.11 に飛ぶ。
34. A¹ と A² が共有する書き間違いと、同グループの伝統から離れる誤りの数は著しいし、ポーチェの刊本に見えるよりも数多い。
35. ポーチェのテキストからは分からないゆえ、A¹ の番号付けのひどい混乱を指摘しておきたい。最初の140章は、番号はテキスト中では正確だが最初の目次では頻繁に間違っており、双方ではほとんど常に食い違っている。第XCL章の最初の数行で2番目の写字生に代わっており、おそらくテキストと目次の間の番号のズレに気づいたのであろう、次の章に本来の番号CXLIではなく、目次の誤った番号CXXXVIIを振っている。その後欠落があり、CXLVIへと飛ぶ。
36. ポーチェのテキストが危険な妨げであり続けていることは、J. H. Charignon, Le livre de Marco Polo etc., Pechino 1924-6中にそれが近代語で再版されたことによって明らかであろう。
37. 熟考の末、私自身のテキストに施した訂正を撤回し、博識な読者の赦しを請う。[訳注: ベネデットのテキスト注には「desore = dette di sopra <上述の>ととる。V: de instade <夏の>、しかし123と矛盾する」(p.54)とある]
38. 自分のテキストに目がくらんで、ポーチェはこのことにもマルコによる「改訂」の証拠を見る(p.729)。
39. これ「[ricci <いが>]」に対するポーチェの注は奇抜である: 「大きな頭巾様の鞆の形をした果

物の産物」。

40. これ [lairons <盗賊>] に対してもボーチェ (pp 275-8) は、FG の読み (barons <封臣>) を唯一可能なものとして熱狂的に主張している。
41. 繰り返すが、改訂、ましてヤマルコ・ポーロによるその痕跡はない。
42. F: LV 8 では、夫が 20 日以上に及ぶ旅に出ると妻は「夫が出発するとすぐ」別の男を取るとあるのに対して、グレゴワールは「その期間が過ぎると」と和らげる。F: CLXXIX 23 では、仏陀の父は気晴らしをさせるために息子に 3 万人の娘を与えたのであるのに対して、グレゴワールには明らかに多すぎると思えたのであろう、「沢山の娘」と言うに止めている。
43. P 591. 同じく pp 250, 635, 685 etc.
44. すでに何度も引用してきたユールの写本リスト 85 のうち、21, 28, 57, 61, 62, 72, 81, 83 番は、現在では紛失したかあるいはその存在が十分には確認されないゆえ、抹消されるべきである。「補遺」中のコルディエの追加リストで、それ以前のリストに対して実際に新しいのは二つだけである。
45. ‘フランクーイタリア語’ と言う呼び方は、ルスティケッロとマルコ、ルスティケッロは彼のいるところできっとその直接の絶えざる監督下で編纂したであろうが、もちろんいささか不合理なものとなる。彼らはきっと単にフランス語で書こうと考えていただろうからである。私が ‘フランス語’ ではなくこの ‘フランクーイタリア語’ なる用語を好んで採ったのは、オリジナル版をその後の他のフランス語版、とりわけグレゴワールの改作版と区別するためである。
46. 例えば、全くの F の言語についての研究となることを恐れた。この興味深い問題については、特別の論文が出るであろう。そうした論文の題材の目録は、同時に我々のテキストのフランクーイタリア語の部分の索引となるだろう。

訳注

- 9*. 以下の各項目で括弧内に挙げられている引用例は省略した。
- 10*. 原文では F の対応箇所は挙げられていないが、ここでは括弧内に示した。
- 11*. これらの箇所では、F は後者 (C¹) とほぼ一致する。
- 12*. 原著 (カムール [ハミ] 国の章) では、君主 (モンケ・カアン) のもとに使者を派遣し、その風習の存続を願ったのは同地の男たち。
- 13*. F: 「もう一つ大変なことを皆さんに言うておこう。この世の君主皆を合わせてもこの大君が有しているほどの富は持っていないのですぞ」(「グラン・カンの紙幣について」の章)。
- 14*. ベネデットのテキストでは osci <糞> (F p 181)。
- 15*. この「結び」Conclusionne は、全体に対するもの。
- 16*. ルスティケッロ作とされるアーサー王騎士物語のバリ国立図書館蔵写本 fr 1463。本書の第 1 章「フランクーイタリア語版 (F)」(拙訳) 参照。Il romanzo arturiano di Rustichello da Pisa, a cura di Fabrizio Cigni, Pisa pacini Editore 1994 に、同写本の全ページのカラー写真、原文の転記、イタリア語訳、解説と注がある。
- 17*. 1824 年フランス地理学協会『旅行記回想録集』Recueil de voyages e mémoires 第 1 巻に Roux de Rochelle により刊行された写本 fr 1116 の転記 (cfr. 本書第 1 章「フランクーイタリア語版」)。
- 18*. ゼラダ手稿の原本はその後 1932 年、トレドでパーシヴァル・デーヴィッド卿によって発見され、1938 年ムールによって出版された。したがって今では、その原本が Z、ベネデットがアンブロジーナ図書館に発見したトアルドによるその写しが Z¹ と呼ばれる (cfr. 本書第 6 章「F 以前の段階」)。
- 19*. Il libro di Messer Marco Polo cittadino di Venezia detto Milione dove si raccontano le meraviglie del mondo, ricostruito criticamente e per la prima volta integralmente tradotto in lingua italiana da Luigi Foscolo Benedetto, Milano-Roma Treves-Treccani-Tumminelli 1932-X は、ベネデットが自

ベネデット『マルコ・ポーロ写本』(六⁻²)

らこれを実行したイタリア語訳である。The travels of Marco Polo, tr by Aldo Ricci, George Routledge & Sons London 1931 はその英訳、愛宕松男訳注『マルコ・ポーロ東方見聞録』(1・2) 東洋文庫 1970 はさらにそれからの和訳。